

人々の農地に対する愛着の根源を探る —京都縦貫自動車道建設に伴う水田買収を例にあげて—

HS23-0122J 大野 純輝

1.研究目的

調査対象地域である京都府丹波町では、2010年に高速道路延長に伴うパーキングエリアと地域復興拠点建設の計画が持ち上がった。その際に、「ご先祖様の土地を自分の代で失ってしまうことが残念」という話を調査対象者のS.N氏がしていたのを耳にした。本研究は、「農地」に関するこのような愛着はどういったところから来るのであろうかという疑問から始まったのである。

2.調査方法

先に述べたような、「農地への愛着の根源」や現代における「農地への意識と社会変動の関わり」を明らかにするため、「農地に関わる法制度」「対象地域における愛着低下の具体的研究」「家系図の作成・ライフストーリー」の3つの方法からアプローチを行った。

3.研究対象

3.1 研究対象地域について

研究対象の地域はN一家が暮らしている京都府京丹波町曾根地区である。京丹波町の人口は2010年で15,736人、前回調査からの人口増減をみると6.85%減である(平成22年国勢調査より)。この地区では現在京都縦貫自動車道の建設が行われており、「丹波PA(仮称)と一体的な地域振興拠点整備事業」という名称である。農地買収先は京丹波町で、土地所有者も京丹波町となる。京丹波町としては、農業が基幹産業の一つであり、米以外にも特産品として丹波大納言(アズキ)、黒大豆(ダイズ)、丹波栗(クリ)がある。

3.2 調査対象者

今回の調査対象者はN家の3名である。以下にインタビュー対象者の属性を示す。ただし、紙面の都合上家系図については省略することとする。

①S.N氏：79歳

・Z.N氏の長男として生まれる。夭折の弟と他出の妹が一人ずつの兄妹構成である。

②K.N氏：43歳

・S.N氏の長男として生まれる。他出の姉が二人の姉弟

構成である

③U.N氏：17歳

・K.N氏の長男として生まれる。同居の弟が一人、同じく妹が二人の兄妹構成である。

4.分析——農地への「愛着」と「執着」に注目したライフストーリー

まず、日本の農地に関する法制度という観点から人々の農地に対する愛着の変容についてまとめると、戦後に農地改革が行われると、創設された自作農を守り、農地の再集約や転用を防ぐ目的とした法整備が行われ、農地所有者の所有意識を高めた。しかしその後、高度成長期を経て兼業化が進むと、相対的に農作物の利益を見込めなくなったために、人々は農地に対して愛着を持たなくなるようになった。さらに所有権移転による農業経営の規模拡大により農業生産量の低下を防ぐ目的で農地の流動化が促進されると、自分で耕作する必要すらなくなった。以上のように、次第に農家が農地に対して愛着を抱きにくくなってしまような法整備がなされている。

一方で、S.N氏のように農地に愛着をもっている人はどのようにして愛着が育まれていったのかという点についてである。S.N氏のライフストーリーからひとつ例をあげる。S.N氏の幼少期における「遊び場としての農地の愛着」である。S.N氏は放課後、自分の家が所有する田んぼへと向かい、「仕事を終えてから農作業を行う両親の傍らで遊び、夕方に両親とともに自宅へと帰るのがずっと続いた」そうだが、この背景には「家」という労働単位がある。家族の構成員が労働者として農業に参加するケースが多いため、「遊び場としての愛着」、そして働く家族の姿を目にすることで「家族の大切なものとしての愛着」が育まれてゆくのである。

次に、先に挙げた「遊び場としての愛着」に至るまでの過程において変化がみられるということ、S.N氏の長男、孫にあたるK.N氏、U.N氏両名の例を挙げて明らかにする。

U.N氏の口述によれば、なぜ同級生や友達と遊ばずに

田んぼに遊びに行くことを選んだのかについて質問すると、「そもそも同級生が近所にそれほどいない」という理由を挙げた。K.N氏も同様に「友達や同級生は近くに住んでいなかった」と、先述したS.N氏のように自分を含めた同級生や友達がみんな自分の家の農作業の手伝いに行ってしまうために遊びには行かずに田んぼに行く生活があったのではなく、そもそも過疎化によって同級生や友達が近所にいなかったことが理由であると語ってくれた。

5.考察——農地に対する住民意識の変容とそれをとりまく地域社会について

本稿では、「農家の農地に対する愛着が低下している今日、愛着を持ち続けている人々の農地に対する愛着はどのように生まれ、育まれるのであろうか」という課題に対して世代間における違いに着目しながら例を挙げて明らかにしてきた。その結果、S.N氏が農地に対して愛着を抱ききっかけとなった「遊び場としての農地」の背景には、農作業の多くが共同体としての「家」を単位とする労働であるということが大きく関係していることが明らかになった。その一方で、世代を越え、農業を営む農家が減少したり、農村における人口が少子化や過疎化といった外的要因によって減少すると「家」「村」の構成員を成していた人々が減り、「家」「村」の仕組みを保つことができなくなってゆく。それによりK.N氏やU.N氏における「遊び場としての農地」の背景には「家」「村」の理論ではなく、「そもそも同級生や友達がいらない」というものに置き換わったのである。

近年、リニアをはじめとしたインフラ事業とその影響を受ける人々について取り上げられることが多々あるが、農地の買収というものは対価を保証金として支払ったり、代替え地を用意すればいいという簡単な話ではない。ここでは紙面や時間の関係上すべてを取り上げることはできなかったが、農地には一朝一夕ではなく、日々の生活の積み重ねや、世代を越えた願いをもって生まれた愛着が宿っているのである。このことを無視することはできないであろう。土地に生き、農業に生きる人が存在することをしっかりと受け止め、身を切るほどの思いをして譲り渡した土地が地域の発展や人々の新たなつながりを生み出し、元地権者が胸を張れるような、すばらしいインフラとなるよう、しっかりと計画と実行力を持って取り組んでいただきたいと考えるのである。

引用・参考文献一覧(一部抜粋)

- 大泉英次,山田良治(1989).『戦後日本の土地問題』.ミネルヴァ書房
- 河田嗣郎(1923).「農民土地愛着心冷却の傾向」『経済論叢』第17巻6号
- 五来重(1908).『神観念と民族』弘文堂
- 田代洋一(1993).『農地政策と地域』.日本経済評論社
- 鳥越皓之(1985).『家と村の社会学』.世界思想社
- 中野卓(1995).『歴史的現実の再構成 個人史と社会史 ライフストーリーの社会学』弘文堂
- 農林水産省(2007).『農地政策をめぐる事象』